# カントル　スラン編

千部渡幹男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カントル　スラン編

【Ｎコード】
Ｎ３０１０Ｗ

【作者名】
千部渡幹男

【あらすじ】
その世界では、能力の全く異なる諸民族が、互いの違いを認めようとせず、何十年も無為な殺し合いが行われていた。誰も戦の起こった元の原因など覚えておらず、ただ、原始的な敵対心だけをむき出しにした戦い。敵も反乱も、全てを武力で押さえつけ続けた戦い。いつ果てるとも知れない戦い。
……が終わり、十数年経った頃から、話が始まります。
初投稿で中学生なので、色々おかしいところもあるかと思いますが、読んでいただけたら幸いです。

## 一　その葬式（前書き）

全く異なる世界の話で、地球から勇者とか来ないので、序盤は説明臭くなると思いますが、何卒。

# 一　その葬式

## 一　その葬式

「どうも、実感が無いんだよな……」

英雄の葬式は、彼の居城の前で、盛大に執り行われた。
棺には既に蔦が絡まり始めており、連綿と続いてきた命の底力を、嫌でも思い知らされる。
身内のみの葬式を挙げるのが普通だというのに、わざわざ屋外で、大勢の者を招いて葬式を行ったのは、
「誰が死んでも、どれだけの物を失っても、人は生きていける。私がいなくなった後に、皆がそれを忘れないか、それだけがただ心配だ。」
彼の遺した、最後の言葉のためだった。

大自然に呑まれかけている棺と、それに集まる、一千を超える人々。
かの英雄、ロウェン・カントルが世に出るまで、相手を差別し、抑えつけ、争いを繰り広げてきた諸民族が、今は同じ思いを共有し、一様に頭を垂れている。
「まあ、素晴らしい光景ではあるけどな」そんな人々を、近くの小高い丘から眺める男がいた。
見かけに対して、声と瞳の輝きが、若い。齢の読みにくい風貌だが、瞳の色から、闘族の出である事がわかる。
「けど、とは？　賭け値無しに素晴らしい光景ではないか」横にいたもう一人の男がその言葉に応じた。
こちらは鳳藍色の目。術族の印だ。
闘族の男とは違い、若い頃から様々な経験を積んできたであろう

事のわかる、風格のある顔立ち。
　言わずと知れた、英雄ロウェン・カントルのブレイン、ギルズ・Ｉ・ナタルムであった。

「だってこんな馬鹿げた話があるか？　有史以来ずっと、散々俺たちをこき使ってた療族の奴らが、たった一人の人間が駆け抜けた後は、こうやって俺たちと肩抱き合って泣いてんだぜ？」彼のいう「俺たち」には、ギルズは含まれていない。
　過去にはギルズ達術族の虐げられた時代もあったが、それは今まで闘族の受けてきた長期にわたる冷遇に比べれば、ほんの一瞬だ。
　それにギルズは彼とは違い、直に差別を受けたことが無い。
「ああ、わしはどうせこき使われた事が無いから、そんな心情は把握できない。それ故お前に綺麗事を並べ説教する権利も無い。だがな、」世界レベルの頭脳は、その鋭い眼光で闘族の男を射抜き、さらに何かを述べようとした。
「……わかるわかる。俺酔ってるんだ。」が、先に闘族の男が姿勢を崩し、彼の口を封じた。
「でなきゃ、何で昔の事なんか思い出すかよ。」不意に立ち上がり、空を見上げる。
「実感ねぇよ……。」そのまま勢いよく後ろに倒れこむ。
「俺、この瞬間が、城の前で寝転んでも殺されない平和が欲しくて、何百人も殺してきたのに……。」
「悪い事は言わないから、葬式の途中に酒かっくらって眠るのはよしてくれよ。」英雄のブレインの、空しい忠告。
「一応お前は『ロウェン・カントルの右腕』だったはずだ。軍の士気にかかわる。」
「もう軍なんて要らない。戦いなんて真っ平だ。」自分の人生を真っ向から否定して、「ロウェン・カントルの右腕」はいびきをかき始めた。

それから暫く経ち、日が傾き、参列する人数も減り始めた頃……。
南東の方角から、豪華絢爛な乗り物と、それを引く純白の動物がやってきた。
そろそろ「ロウェン・カントルの右腕」も起きた所で、城の自室に帰ろうとしていたギルズは、その登場に目を奪われた。
相変わらず、過剰装飾といわれてもしょうがないような煌びやかさが、目に余る。
「ん？　あれ、『シザ』だよな…？」
「ああ、多分」ギルズは、隣の一闘族の、素直な疑問に答えた。

英雄の死を悼んでいた人々の多くも、驚き、その乗り物と動物の動きを凝視する。その内の誰かが、その名を呼ぶ。
「シザ」……言わずと知れた、混血族のキャラバンだった。
彼らは砂漠の果てに都市を作り、一千年以上も極力中央の政治と関らないようにして暮らしてきた。
本来なら、各都市にて交易品を売買する「シザ」も異例の事だ。
それが。
おお、とそこにいたほぼ全員が息を呑む。
車の中から、一人の男と、その護衛らしき人物数名が乗り物から降り、英雄の棺へ向かった。
自然と、道が開く。
「…祈ってる…な…？」身なりから察して、向こうでも相当地位のある人物だろう。
彼の問いかけに、英雄のブレインは、
「時代が変わり始めた、という事だろう」とだけ答えた。

## 二　その葬式の直後

二　その葬式の直後

「三日後、だもんな……。」英雄の右腕が呟く。
葬式も一通り終わり、今は城の自室に帰る途中である。
「…何が」正当な情報を与えられれば、必ず正当な答えが返せる。
その自負と、その自分にすら意味のわからない語を発する男に対する不満が、知らず知らずのうちに、ギルズの声に不快な響きを持たせた。
「カントルが死んだのが、だ」
「ああ……。」頭の後ろに手をやるギルズ。
「まさか、スクライトの今後について一切合財一気に決めて、その三日後に死ぬとはな」そう言いながら、ふと隣を見ると……、
「くそ、何のために今まで頑張ってきたんだか……。」
珍しい事に、闘族最強を誇る男の眼に、涙が光っていた。
今の発言は不用意すぎたか、と、少し自分を反省しながら、俯いて歩く。
「……それでも、あいつは……。」ギルズが、何とか慰めようと声をかけた。
そもそも、この男が酒を飲むのは、極端に嬉しい時か、極端に悲しい時かのどちらかだと決まっているのだ。
「幸せだったんじゃないか……？」

「何が幸せなものか！！」英雄の右腕は、いきなり激昂した。
「一番信用していた術族には裏切られて、成人しないうちから城を追い出されて、…何人も何人も、身近な人間が死んでいって…戦いのせいで次男まで亡くして！！何が幸せなものか！！」くそ、と叫んで、城の壁を蹴りつける。

「これが『歴史の必然性』が生んだ結果なんだとしたら、歴史なんか糞くらえだ！！」
「…お前、やはりまだ酔って」
「そんな言葉で片付けるな！！おりゃぁ正常だ！！」と言ってはいるが、眼が、完全に向こう岸へいっている。
「……カントルよ…なんで死んだよ……。」
ギルズはただ、古くからの友であった闘族の嘆く様を、黙って見つめる他、なかった。

## 二　その葬式の直後（後書き）

タイトルは、その話の起こった時を表すようにしていきたいと思います。
今後は、学校も始まるし一週間に一話程の投稿になると思うので、長い眼で見守ってください。

# プロローグ

プロローグ

ロウェン・カントル。何度も欺かれ、裏切られながら、自分は彼らを許し続けた、まさしく聖人。

ロウェン・カントル。民族間の争いを無くそうと死の間際まで奔走した、まさしく伝説。

ロウェン・カントル。長らく続いた戦争時代を、たったの一代で終わらせた、まさしく英雄。

その死に、スクライト中の民が嘆き悲しみ、後を追ったものも少なくない。

が。

それでも、生き残った者は再び日常を繰り返さねばならない。

砂漠の果て……聖地ラスジェムの混血族たちにおいても、それは同じ。

葬式の三年後、ある少年の日常から、物語は始まる。

# 1　その葬式の三年後の一混血族の進路決定その一

1　その葬式の三年後の一混血族の進路決定その一

窓側の席に座っている彼、スランが見える範囲に、なにやら珍しそうな鳥が飛んでいた。

全体として青みがかっているが、翼の先端だけ違う色が混ざっている。

あの鳥の名前はなんだろう……。彼はぼんやりと、思うでもなく、まあ、思った事になるのだろう。心から知りたいわけでもないけど、そこらを飛んでいる鳥の名がすぐにわかったら人生楽しいだろうな、と、そのくらいの興味だ。

教室の中では物理の授業が行われており、正直興味もないしやる気もないし今後の人生においても概ね理解しないでも大丈夫なような内容だと判断しており、しかも授業終了まで後ほんのちょっとなので、全く集中できない。

かつ今は三月の後半。外には花が咲き誇っている。

特に花が好きというわけでもないけれど、こんな日に埃っぽい教室でいつ使うのかわからん事を学ばなくてもいいじゃないかとは思う。

そんなわけで、スランは大欠伸をした。

「というわけで、ね、ま、今日はね、これでね、終わります」読点の好きな先生だ。

「きりーつ、れーいありがとうございましたーー」男子学級役員が立ち上がる。相変わらずの、間の抜けた声。

「ありがとうございましたーー」それをあくび交じりに復唱する生徒たち。だからどうという事もない、ここでは見慣れた光景。

「ねぇナンチ、あの鳥なんて名前？」何気ない日常を思いながら、

友人の所へ向かい、先ほどの鳥の名を確認する。
「知らん」
「知らんのかい、情報屋だろ、一応」
「『あの鳥』で答えられるわけないだろ」
「あ、そう」
スランはそう言い、他の生徒と同じように、教科書類を片付け、掃除場所に向かった。

掃除場所から戻ってきてしばらくすると、担任の先生がいつも以上に重々しい顔つきで、教卓の上に紙の束を置いた。
普段から暗い顔つきの先生ではあるが、今はわざと作っているような深刻さが窺える表情だ。生徒に解決できないような自分の問題で悩んでいても、それは表に出さない人だから、多分実家で飼っていた家畜が死んだとか、そういう類の私事があったわけではないだろう。
となるとあの表情の原因は生徒にある。
どうせ誰々がトイレの壁に落書きしたとか、何組の花瓶が割られたとかそういう話だろう。しかし、犯人をあぶりだすためだけに紙を使うのは、いかにも勿体無い。まあごく質の悪い紙なので、さほど環境に影響は及ぼしていないだろうが。
スランはそんな事を思いつつ、前々から読んでいた本のしおりをとって、読み始めた。
「何？あのプリント」特に聞き耳を立てているわけではないのだが、近くにいた生徒の会話が聞こえてくる。
「また誰か、学校の備品壊したのかな」
「元気だよね、そういう方々っていちいち」
「そうそう」そうだそうだ。そういう奴らも、もっと別の事にエネルギーを使えばいいのに。
いや、もちろん本も読み進めているし、それなりに熱中している

のだ。が、一つの事に全神経が向かってしまうほど人間の脳内構造は単純ではない。
　それに、あまり意味のない雑談を耳の端で聞きながらの読書の方が、静かな空間で読むより、かえって集中できる気がする。
「何も書いてない紙配られて『知ってる事を全て書け』って言われてもさ、正直書く事無いよね、あれ」　全くだ、と、興味がないなりに考える。
「いや、……進路調査かなんかじゃない？」彼が国を追い出されて……あれ？この主人公は療族だったっけ。てっきり闘族だと思ってたけど。
「あ、そっか。そうかも」そうか。だから追い出されたわけだ。何冊か掛け持ちで呼んでいると混乱してしまう。
「今年でもうこの学校は卒業だもんね」そうか。進路調査か。あの先生が深刻そうな顔をしていたのも、まあわかる気がするな、それは。
「進路……って言われてもねえ」と言っても大多数が実家の職を継ぐからな。進路というより卒業試験の心配だろうけど。
「あんま実感ないよねー」あ、さっきの闘族が主人公のもとに。何しに来た。
「ケイムはどうするの？」ごめん！？許されると思ってるのか！？でも許しちゃうんだろうな。そういう男だからな、こいつ。
「ううん……やっぱりスクライトの高等学校に進もうかな……っと……」え、「やっぱり」？
「へぇ、なんで？」その生徒は「やっぱり」という語を用いたが、砂漠の中に孤立している形の地形であるこのラスジェムを、わざわざ遠く離れて進学するなんて事は、稀なのだ。
「将来、ここの近くに高等学校や研究施設が作りたいの。そのためにも良い高等学校に入らなきゃと思って」へえ、そんな事考えてたのか。珍しい。
　若干の野次馬根性が、本にしおりを挟ませた。人の意見を聞くの

は、社会学と分析学両方の勉強になるから、という言い訳のわざとらしさは、スランが一番よく承知している。それでも、本の内容を一旦横においてでも、聴いてみたい話であった。
「真面目だねぇ。いくら勉強したって術族になれるわけじゃないのに」しかし、彼女の友人が、彼女のせっかくの決意を冷やかす。
「そうそ。研究は術族たちに任せて、私たちは畑でも耕してればいいのよ」
……全くの他人事ながら、今の言葉はちょっと気に食わない。
スランは憤りというほど積極的ではないものの、まあ悪い感情を持った。少し目を上げて、向こうに気づかれないようにその発言の主を確認する。確か、実家の仕事を継ぐと言っていたローリルとかいう奴だ。
個人的には、他人と違う道を進もうと決意した者を、他と同じように流れた者が批判するのは許せない。
自分が楽な選択に流れた事を、賢い事だと思っているような節があれば、なおさらだ。さっきまで本読んでた癖に、人の事に口出しすんじゃねえよ、と言われたらそこまでだが。
「どこまでいっても混血族は混血族で、術族は術族なんだから」と、次に言ったローリルの言葉に、一瞬、ケイムの表情が変わった。
「……そういう考えは、おかしいんじゃない？」すぐに表情を元に戻したものの、否定の意思が断固とした口ぶりだ。
「おかしいって、何が？」その答えとして、彼女は急にまくし立てた。
「歴史で習ったでしょ？学問を術族だけに、戦いを闘族だけに、適性があるからって何かを一つの民族に押し付けていたら、きっと争いの種になる。スクライトの学者には及ばないにしても、知識を一般化する意味も込めて、この地にもそういう施設を作らなきゃいけないと思うの」強い意志が垣間見える。
「時代の流れからしても、カントル様がカント地方を統一なされて、知識の一般化が重要になってきたし、ラスジェムも、変革の時を迎

えようとしているのよ……多分」と、せっかく彼女が一所懸命言葉を選んで説得しようとしているのを、ローリルはひらひらと手を振って制した。
「はいはい、わかったわかった。立派な決意はわかったけど、もうそろそろ席着かないと先生に叱られるよ」
「いや、でも」
「もういいから」どこがいいんだよ、とスランは思った。

用紙が配られ、
「はい、進路調査です。まあどう進むにしても、卒業試験は受からんとまずいから、頑張って勉強しろよ」といった旨の事を、担任の先生はグダグダと時間をかけて話した。
が、もうすでにスランは、進路より何より、ケイムを馬鹿にしたローリルに腹を立てる事に精一杯だった。さっき読んでいた本の内容は頭から消し飛んでいる。
彼女は、何も間違った事は言ってないのに。まさか、女子でもあいう考えを持つ人がいるとは思ってなかったけど、いるとわかった以上全面的に肯定したい意見だ。
ケイムに慰めの一言でもかけてやりたい、出来れば意見交換したいと思ったが、……スランは基本的に、女の子に何かしらで関る事ができない。

いじめに遭ったわけでもない。女の子との関係での黒歴史だってない。ただ、徐々に異性に対し興味を持ち始める自分が怖かったのかもしれない。元々交友関係が広かったわけでもないし、ただ一人の例外を除いて、女子生徒と関わる機会は限りなくゼロに等しい。
が、まあ、普段はいいのだ。夕闇の中、一人歩く通学路でふと虚無感に襲われたりする事もあるが、せっかく新しく友人が出来たのに誰か好きな人はいるのか、と聞かれただけで絶交してしまった事もあるが、基本的に関わらなければいいだけの話だ。困るのはこう

いう時。
根っからの正義感ではないけれど、自分と同じ意見の人が否定されるのは、口惜しい。男子とか女子とか関係なく。
ローリルを論破してやりたい所だけど、どうせあの様子では議論を吹っかけた所で「はいはい」としか言わないだろう。それならせめて、ケイムを慰めたい。一応席も近いことだし、面識はある。でも、慰めたいと思う反面、絶対話しかけられないと拒絶する自分もいる。
私用で女子に話しかける時、多分他の男子生徒以上に抵抗を感じてしまっている。面倒臭い自分が少し嫌いになる。

担任の先生の話が一通り終わり、進路調査のプリントが配られて、少し周りが騒がしくなり始めた頃、
「あ、あのさケイム」スランはついに、勇気を出して声をかけた。
「ん？」慰める、というか議論するだけだから大丈夫だ、と自分に言い聞かせる。
「何？」いざ話しかけてから話す内容考えてなかった、なんてオチにはならないように色々考えて、話しかけた。いやあ、僕もそう思うよ。やっぱりこのラスジェムにも研究施設は必要だと思う。って言っても僕は科学系統苦手だから、中々高等学校には行けないだろうけどさ。ははは。てかさ、全然馬鹿にされるような事じゃないよね。むしろそこまで考えてんのは凄いくらい。やっぱりここにも、中央から来る物資が途絶えた時に、ある程度文化的に暮らしていけるような施設は必要だと思う。
それに対するあらゆる反応の対策まで考えたのに、次の一言が口から出てこない。
「……あのさ」それから後に、長いのか短いのかわからない沈黙の時間が続き、
「……」珍しくスランが話しかけてきたというので少しだけ興味が宿っていたケイムの目が、白ける。

「ああ、……なんでもない。ごめん」なんでもない事にしてしまった。
机の方を向いて、座りなおす。少ししてから、ようやく先生の話が耳に入ってくる。と同時に、頭をかきむしる。
「はぁー」と、ため息をついたスランを哀れむような目つきで、
「ねえ、スラン君、一つ言っていい？」ケイムが、一言述べる。
「な、何？」
「ウザい」
「え、……えぇ！？」いきなり来た予想外の言葉に反応もワンテンポ遅れる。
「ていうか、そういう態度だから嫌われるんでしょ？」気だるげに言い放ち、前を向き、そ知らぬ顔。
嫌われるって、誰に！？男女とも嫌われるほど親しくなっている人は少ないし、女子で話せるただ一人の例外には最近会ってないから、嫌われないだろう。それでも。
誰に嫌われているのか聞き返したかったが、どうも機嫌が悪そうだったので、余計に訊けない。それにしてもいきなりウザいなんて言われるとは。でもそれが意外だったのは女の子は皆おしとやかって幻想があったからでは。そんな偏見を持ってるつもりはなかったけど。
「……すいませんでした」まあ、とりあえず、謝る。
どうすればいいんだろう。誰に嫌われているのか無性に知りたくなってきた。わざわざ知り合い程度のスランに嘘をつく必要は無いから、ケイムの言った事は事実だ。誰かに嫌われているのは確かなんだろうけど、誰に。
……まあいいか。まあいいか。まあいいか。全く良くないのに、脳内で同じ言葉を反復し、いい事にする。そして少年は、当分、気に

しないでおこう、とごまかした。

## 2　その葬式の三年後の一混血族少年の進路決定その二

2　その葬式の三年後の一混血族少年の進路決定その二

忘れよう。当分、気にしないでおこう。

よし、そうだ。気持ちを切り替えろ。今は進路調査の時間だ。それが肝心だ。そうやって気持ちを切り替える。

少年は改めて進路調査の紙に向かい、自分が進みたい進路について、考え始めた。

卒業試験を控えた最高学年とは言っても、スランはまだ数え年で十五なのだ。

どんな職業があるのかすらほとんどわからない状態で、進路なんて、そう簡単に決められるものではない。

かといって、このカント地方全体が変革期を迎えている今、保守的な親の意見に従って農地を耕して暮らすなんて、明らかに勿体無い。

どうしようなぁ……。

スランの視線は再び窓の外に向かった。それにしても「そういう態度だから、嫌われる」って、誰の事なんだろう。最近、誰と話したっけ。いやいや。何を考えてるんだ。

つい別の事を考えてしまう自分を制して、再び無理やり進路調査の紙を凝視するスランであった。

そもそも「職業選択の自由」が法律に明記してあるくせに、一定の職業に就いたら、必ず種族間で適性の差が出てくるじゃないか。

全民族に平等な権利を与えたロウェン・カントルは偉大だと思うけど、でもやっぱり種族間の適性の差は歴然としているわけで、何でもかんでも平等にすれば良いってものでもないと思うんだけどな

あ。

自分に関する選択について、一般的な考えを持ってくることは、選択から逃れようとしているだけなのだ、というのと、ラスジェムには混血族しかいないのだから、種族の違いはさほど問題にならないのだ、という事に薄々感づいてはいるのだが、その現実逃避じみた推論を止められない。

もし、術族がいなかったら…と、考えてみる。明らかに脳の構造が数段階上の種族がいなくて、皆脳のつくりが平等だったとしたら。

多分、混血族の中にも、上の学校に進む人間が大量に現れて、学問は今みたいなごく少数の人しか知らないものではなかっただろう。さらに、たくさんの職業と関る機会が増えて、ゆっくりと卒業後どのような職業になるか決められた、はずだ。

僕たちに与えられた時間は少なすぎる、とスランは思った。十五で職業選択なんて。ゆっくり自分の人生について考える余裕がないから、いくら法律で「職業選択の自由」が認められていても、結局親の職を受け継ぐ人が減らないんだ。

「こら、スラン。他事を考えるな」先生の声。いや、別に他の事を考えていたわけではないんだけど……。

「すいませんでした」とは思うものの、とりあえず謝っておく。

まあ、一種の処世術だと割り切ってしまえば、謝るのも別に良い。

本当に、どうしような……。スランの視線はまた泳いだ。

この紙に書いた職業に本当に就くわけではないとしても、当面、先生の目をやり過ごすためにも何かしら書かないといけない。成績が、決して良いわけではない―（特に科学に関しては絶望的な）スランは、少しでも素行が悪いとすぐに問題児扱いされる、ぎりぎりのラインに立たされている。進路がきっちりと決まっている生徒なんかそんなにいないとしても、白紙で進路調査の紙を提出して、勉強以外で目をつけられるのだけは避けたい。

時計を見ると、もうすぐホームルームの時間も終わる。

で、周りを見ると――――、
……何これ。
皆顔をうつ伏せて何か書いていて、ぼんやりと周りを見ているのはスランくらいだ。
これは、目をつけられても仕方ないな。
納得出来てしまったのが妙に悲しい。先生と目が合いかけたので、あわてて紙に視線を移した。

意識してみれば、確かにカリカリカリカリとペンのはしる音が聞こえてくる。
そういえば、さっきから、紙の内容を見てなかった。スランは、今さらになってようやく、紙にクラス名と名前を記入した。
もしかしたら、具体的な職業が決まってなくても、一つ目や二つ目の質問くらいなら書けるかもしれない。
というか書けないとまずい。
とりあえず、一つ二つ適性検査のような質問がある事を願って、スランは視線を下に移動させた。

問一　あなたはどんな職業に就きたいですか。具体的な物があれば記入しなさい。
（　　）

いやあ、どんな職業につきたいですか……っていきなりクライマックスな質問されても。
と問一を流して問二を見る。

問二　その職業に就くためにはどんな努力が必要だと思いますか。思いつく限り書きなさい。

［　　］

……一番書けてなかったら二番も記入できない仕様って、どうなんだろう。

こんなの書けるわけないじゃん。もう一度顔をあげると、それでもやはり皆が集中力をみなぎらせて紙に何かしら書き付けている。諦めの気持ちが強くなって、スランは遠くを見つめる。虚空を見つめる、と言った方が近いかもしれない。

そんなこんなしているうちに、記入の時間は終わり、

「はい、それじゃこれ、二日後の三月十三日に提出するように。さようなら」ほとんど書けていない生徒はいなかったのだが、幸いにも先生は二日の猶予を与えてくれた。

ので、スランはバッグの中に他のプリント類と一緒にその紙を入れ、帰路についた。

## 三　その葬式の七日前

三　その葬式の七日前

ラク・リュース城の一室に、私は呼び出された。
国の要人の中でも最高位に属する者のための部屋……ギルズ・Ｉ・ナタルムの部屋に。
白色金属に伝説の動物の彫られた扉は、かつてこの城が栄えていた頃を想起させる。「英雄」と「英雄の右腕」、「術長」の住まう城である事から、今でも栄えている内に入るのだろうが、どうも政治の中心から遠いため実感がわかない。
響く足音を回廊に残し、私は彼の部屋に入った。

のんびりと、天窓から城下を見つめつつ、彼は切り出した。
「カントルよ」何気なく私を呼び捨てに出来る人物は、ほんの一握り。
「なんだ」旧友と高位の家臣のみだ。彼は前者に含まれ、それゆえに飾り気のない返しができる。さらに、名実共に私のブレインであり、一般的には、術族の最高権威でもある。
「わしは、やはり歴史書を編纂しようと思う」こちらに眼を合わさずに、言う。
「何で今さら。死んでから親に会うのが怖いからか」ナタルム家は、代々歴史書を編纂する、由緒正しい術族の血筋だ。
ギルズは、その長男にもかかわらず、私のような「粗野で知性の欠片もない人間」に仕え、歴史を狂わせたというので、半ば勘当扱いになっている。ギルズを嫌う、家柄に囚われた術族も、少なくはない。
「別に、家は関係ない。ただ……」
「ただ？」

「術族ではないからといって、将来有望な若者たちが、勉強もせずにファッションやらなんやらに現を抜かしていていいのか、とふと思ってな。若者にもわかりやすい歴史書を作ろうと思い立った」
「それは流行についていけなくなった僻みではないのか」
「……あながち間違いではない」ギルズ自身若いときには道楽の限りを尽くしていたので、若者の素行に文句の言える立場ではないはずなのだが、全く一体、どういう心境の変化なのだろう。
「とりあえず、見て欲しい」ギルズは、私に薄っぺらい紙を見せた。

元々一つの最も進化した哺乳類だった我々が、何故このように三分割されていったのかは誰にもわからない。あるものは「癒し」に、あるものは「学び」に、またあるものは「戦い」に…。その進化は、約四十万年前に始まり、今現在でも進んでいる。
療族、術族、そして闘族。十万年前には、いくら姿かたちが同じでも、もうそれらは全く異なる生き物であった。その違いが認められない悲劇により、前ササク暦、特に十世紀以前は血塗られている。
〜ギルズ・I・ナタルム六世編纂「大カント史」第一章「古代・一」冒頭〜

「ギルズよ、ついに惚けてきたか」私は、一読して言った。
「いや、文章が稚拙なのは認める。だが、それはないのでは」
「いやいや。学がないから断定は出来んが、これは小説か何かだろう。未だかつてこんな文章を歴史書として紹介された事は一度もない。私が年をとって頭が固くなっている事を差し引いても、これはない。何故三民族の説明から入る」
「だから、若者にもわかりやすいように、さらに言えば中等学校の副読本になり、闘族の坊ちゃんや療族の嬢ちゃんたちの机に置かれるようなものを作ろうと思ってだな」ギルズは食い下がる。

「別に、私は止めろとは言わない。勝手に作ればいいが、他の術族や後世の人間が自分をどのように評価するか考えた方がいいんじゃないか」私がそう否定すると、彼はフン、と鼻をならした。
「未だに『知識の一般化』に反対しているような連中の批判なんか、痛くも痒くもない。それにどうせ、この試みが失敗した所で『ギルズ・I・ナタルム：若き日の聖覇王、ロウェン・カントルの実力を見抜いた、孤高の天才軍帥。晩年は惚けた』と評価されるだけだ」
「……。」
「最後の一文など誰も読んどりゃあせん」
「……いや、それは」
「ま、もう全部作っちゃったし」ギルズは言葉を遮り、奥の引き出しから、分厚い紙の束を取り出した。
「え、は、全部？」思わず素で聞き返す。
「ああ。古代・一からチャミ期・五まで」事もなげに言い放つギルズに、動揺しかけ、そうだ、術族の仕事をこちらの定規で測ってはいけないのだった、と思い直す。
焦茶色の本棚。青鈴色の照明。
辺りを軽く見回し、一、二度向こうに気付かれないよう深呼吸し、問う。
「……道理でさっきの紙、黄ばんでたわけだ。それでは何故さっき『歴史書を編纂しようと思う』などという言い回しをした」紙の束をめくりながら、答えるギルズ。
「そりゃあ、ナタルム家の人間はこんな本、出版させてくれないだろうからな」
「……ああ」術族の誰かに、カントルの名義で出版させて欲しいから、というわけだ。

印刷術や航海術など、便利で画期的な技術は、全て血統の正しい術族が独占している。他民族に技術を伝え、利用しすぎると世界規模での問題が起こる、という言い訳にもなっていない言い訳だが、

まあ書物を大量生産するために森林が伐採されていく様は確かに心痛い物があるし、その点についてどうこう言うつもりは無いのだが、こういう本を出版するとなると中々面倒である。

別に普通の本なら、どんなふざけた本でも、闘族が書いたものでも、金さえ出せば出版してくれるのだが、こういう場合ナタルム家の名誉に傷をつけかねないため、術族たちも出版を渋るであろう。術族の家を傷つける本を出版した事実は、術族全体の損害にも通じる。確かに、私にこの原稿の存在を伝えておかなければならない所であった。

それにしても、きっと「惚けた」で通用する年になるまで、ずっと書き溜めていたのだろう。私は積み上げられた原稿用紙の束を見て、思った。術族連中からは多くの批判が来るだろうが、確かにこういう小説チックな歴史書と言うのは、闘族や療族が歴史に興味を持つきっかけになるかもしれない。賭けに失敗したとき、少しでもナタルム家の名誉を守るため、彼は後の一生を惚けたふりをして過ごす覚悟を決めているのだ。

編纂―（むしろ執筆だが）しようとおもった真の理由は多分、「スクライト全体の知識レベルを底上げするため」。彼は我が身を投げ打ってまで、私が最近推し進めている「知識の一般化」を後押しして……。

いや、待てよ。

「これを、……書き始めたのは、いつごろだ？」

「ああ、ここの文章を書いたのは、あれだ、ちょうどお前が家を追い出された頃だ」古代・一を指して、言う。

「……家を追い出された頃？」できるだけ驚きが表に出ないように、問い返す。

「ふぇひぇひぇ」表現しにくい音を用い、ギルズは笑った。

「それって、……十……」あまりの事に言葉が詰まる。

「五、六の頃だったな。二人とも」

「あ、え、じゃああの時には既に、この年になれば私がこの国を築き、『知識の一般化』を図ると、わかって……？」
「ああ。歴史を狂わせたから勘当、って多分この事を指してるんじゃないかと思ってる」という事は、ナタルム家の方としても、ギルズは、私に仕えた以上この位はするだろう、と思って何十年も前に勘当したわけか。
「予想だが、この本がなければ『知識の一般化』は上手くいかなかったはずだ。歴史を確実に塗り返る書物だから、……一人の友の頼みとして、交渉を頑張って欲しい」
凄まじすぎる術族達の争いを垣間見て、私は目眩さえ覚えた。

## 3　その葬式の三年後の一混血族少年の進路決定の後

3　その葬式の三年後の一混血族少年の進路決定の後

スランは、自宅に帰るとすぐに、二階の自室に駆け上がった。

父親は無口。母親はどうせ、顔を合わせても勉強の事しか言わない。そのくせ、気象学以外の学問はあまり必要そうに見えない農業を引き継げ、とも言ってくるので、最近は帰ってきても挨拶すらしない。

別に反抗期なのではなく、きちんと理由があって、疎遠になっているわけだ。いや、そういうのを反抗期と言うのだろうか。

とにかく、スランと両親は、仲が悪い。

部屋に入ると同時に、微妙なかび臭さが鼻をつく。面倒臭くて、中々掃除をしないせいだ。

以前は、よく母が部屋を掃除しているか確かめに来たので清潔だったが、スランの年齢が上がり、勉強の事や将来の事で意見が食い違うようになってから、だんだんと確かめに来る数が減ってきた。

そして今や、部屋が片付いているかどうか確かめに来る回数は皆無となり、部屋は散らかり放題となった。

まあ、どこに何があるか一目瞭然で、使いやすい部屋になっているとも言えるので、最近は片付けようと思う必要すら無くなってきて、ますます「自分の部屋」といった感が強くなっている。

スランは、とりあえずベッドを整えると、その上に寝転んだ。足の先から、疲れが取れていくのが感じられた。

しばらくの間、そうやってベッドの上に寝転がり、無為な時間を過ごしていたのだが、程よく重いバッグを持って下校してきた疲れが取れると、何かしなければ、という気分になった。

何しろスランは中等学校最高学年。勉強も何もせずに、一日中ぼ

んやりと寝ているわけにはいかないのだ。
その時思い浮かぶ、二つの宿題。物理の、なんかよくわからない法則に関するなんかよくわからないレポートと、進路調査の紙の記入。
迷わず、後者を先に片付ける事を選択した。
何しろ、前者は丸一日かかっても片付かない可能性がある。どっちもどっちだが、せめて進路調査の紙の方が、抵抗が少なかったのだ。

改めて、「問一」を見てみる。

問一　あなたはどんな職業に就きたいですか。具体的な物があれば記入しなさい。

（　　）

改めて冷静に考えてみたら、どんな職業に就きたいか、であって、どんな職業に就くつもりか、ではないんだな。という事は、親の意見とかは一旦無視して、自分だけの意見を書いても、別に言い逃れできるわけだ。
スランは、問いの意味をそう解釈した。
とりあえず現時点での自分の意見を書くだけ、だ。こうなりたいな、という理想。現実可能かは考えず。生徒としての希望を。
なら、……。と、筆箱をバッグから取り出し、無心に書き付ける。
不思議と、それを普段聞いたり、口に出したりするときに感じるような圧迫感はなかった。

意外なほどあっさりと書き終わった。
「『シザ』か……」あっさりしすぎて、これで良いのか、と逆に不安になる。
最近行ってなかったから忘れてた、というのに近い。頭のどこか奥にへばりついてはいたのだが、まあ無理だろう、と。それで、教室ではとっさに思いつかなかったんだ。
ぼんやりと、紙を透かしてみる。
「シザ」。単純な単語。下手糞な文字。
「『シザ』……」よくその語を噛みしめてみれば、純白のルクや煌めく乗り物など、「シザ」にまつわる様々な記憶が映像となって頭をよぎる。自然と頬が緩む。
宴の晩。揺れる炎。名の知れぬ甘い飲み物。蓋をしていた記憶の、全てが懐かしい。
療族。術族。混血族(キアン)。八年前のあの日から、意識的に忘れようとしていたそれらは、あまりにも美しいままだった。
月の綺麗な晩だった。母親に手を繋がれて帰る道さえ、今とは似ても似つかない輝きに満ちて。
ほんの子供だった自分の夢を真面目に聞いてくれた人達。
酔っ払った大人たち。そして円剣。
「あー、懐かし……」独り言を呟きかけて、少し引っかかる何かに気付く。

「……円剣！？」
何気なく思い出した言葉に、多幸感が吹っ飛び、頭を殴られたような衝撃を感じて思わず腹筋フル活用して起き上がる。
そうだ。円剣、どうしたっけ。
八年前のあの日を思い出す。ラスジェムに「シザ」が帰還し、僕

が宴に参加したあの夜、家に帰ってきてから、どうしたっけ。
確か、親に叱られて、円剣はそのまま外の倉庫にしまってあるんじゃなかったか。
捨てられてたらどうしよう。恐ろしい推測が頭を飛び交う。あそこに置いてあるものガラクタばっかだから。ああ、なんでそのままにしておいたんだろう。八年間も。
どうしよう。円剣の授業なんてサボり続けてたし。全然使えないんじゃ。いやいやそんな事よりも。円剣は今ちゃんとあるのかどうか。
気付いたら、階段を下りていた。

部屋の中とはまた違うとかび臭さの物置。年季の入った臭さ。
確か、この中にしまってある筈だ。スランは、物置の中を、手探りで探し始めた。

多分、純血の闘争民族、闘族ならこの程度の闇は難なく見通せるのだろうが、生憎混血族（キアン）のスランには闘族の血が三分の一しか入っていない。体育の成績を見る限り、それ以下かもしれない。となると、頼りになるのは触覚だけだ。
またもや、昔あんな貴重品を、ゴミかどうかの区別もつかないものが大量にしまいこんである物置にしまった事を後悔した。

それから少しして、スランがいい加減探すのをあきらめようとした時に、円剣は見つかった。物置に入るわずかな光に、平面部分が反射して光ったのだ。
それを、一刻も早く手の内に納めたいとばかりに、物置から引きずり出す。刃を出した状態で思いっきり物置から引き抜いたので、多少周りのものを傷つけたかもしれないが、どうせ今後一生日の目を見ないようなものばかりだ。かまうものか。

物置の中身は放っておいて、スランはそれを、改めて確認した。
間違いない。あの時、「シザ」の男にもらった円剣だ。
その古びた金属独特の見た目を眺める。あの日の宴が、より鮮明に、思い返される。

## 四　その葬式の三年後の英雄の右腕

四　その葬式の三年後の英雄の右腕

「本日は何をいたしましょう」

「いたしましょう……って言われてもな」何故か普段以上にびくびくしている男を見つめ、ふと思い当たる節があり、鎌をかけてみる。

「俺、……前、何か言ったか？」酔うと記憶がなくなるという、我ながらすこぶる危険な性格だ。

「はい。先日、『シザ』の確か……クシャトレイド様と共に、酒樽を空になさった時に……」言葉に窮する。

「その……」よほどの事を口走ったらしい。

「ああ、忘れてくれ、すまなかった」酒樽を空になさったとは、また大層な表現だ。

「いい加減に、俺も齢をわきまえねばならんのだろうがな」

「……」一兵卒にはなんとも答えかねる発言をかました事に気付く。

「それじゃ、ま、いつものようにやっといてくれ」男は、ようやく顔を上げた。

「は、はい。……いつものようにでよろしいわけで」安堵の表情を既に隠そうともしない。

「ああ」できるだけ威圧感を与えないように答えたつもりだったが、彼は再び身を縮めた。そのままの形で待機する。

「……行っていいぞ」走り去っていった。

大体俺は当たり前に偉いんだから、もっと威張ってもいいはずなのだ。戦場へ行っては人を殺し、帰って来ては酒を飲み、の生活を繰り返してきただけで、犯罪者にならなかったのは単にカントルのおかげだ、と思うところからこう、何というか大将に足る器が出来ないのだろうか。

人を殺す重み、なんて安易に口走る事も許されないような命題に、

俺は酒を飲んでごまかし、向き合ってこなかったんじゃないだろうか。
この年になってから、もう遅いのだが。俺は練習場を歩き回る。
よくやってると思う。怠けもせずに、きちんと。練習場の長を任されている俺が通りかかっても練習態度が変わらないという事は、常に全力で励んでいるか、取り返しがつかないほど腐敗しているかだ。練習内容を見るに前者である事は明らか。
空は青い。山は緑。練習場には独特の熱気と後ろ暗さが漂っている。別に何か後ろ暗い事をした人間がいるわけではなく、むしろ殺人が仕事だからそういう目で見れば全て後ろ暗い事というか、そういう雰囲気が、何百年も前から練習場だったこの地には染み付いている。
療族の方も見回る。療族は闘族とは別の練習形式で、療族のリーダーが統率するから、見回る必要は無い。が、闘族の方でも、自分の練習をするならともかく、いる必要がほとんどない。
と、療族の長がこちらを向く。
「ああ、気にしないで練習を続けろ」はっ、と向き直った。
その様子を観察するに、なにやら、やはり闘族と異なった知的な印象を受ける。闘族の訓練は、個々の能力の特化を第一に考えている。そのため戦争になっても、個人対個人が集団で戦っているに過ぎない、ばらばらの動きだ。個々の戦闘も、一見すれば高度な技の応酬をしているように見えるが、動きに目が慣れてくると、感覚神経と運動神経のより優れた者が勝つ、ただそれだけだとわかってくる。
療族の練習は壮観だ。号令一つでざっ、と目視できる狂いがほとんど無く槍が突き出される。号令一つでまた戻される。
左手で構えた円剣から一斉に刃が飛び出す。運動神経ではどうしても闘族に劣るから、集団の力で敵を圧倒するという、洗練された方法だ。

こうした療族の動きを見ると、闘族はいっそその腕力と視力の良さだけを生かして、遠くから弓の射撃でも行っていた方がいいのでは無いか、と自分の半生が恥ずかしくなってくる。いざとなれば療族はすぐに傷が癒える特性を生かして、肉の盾に出来る……という扱いを数百年前に受けたせいで療族の反乱が起きたんだっけか。その反動で療族こそ最も神聖にして偉大なる民族とか言い始めて独裁戦乱の世が長い間続き、闘族が蔑視されて術族は研究所に押し込まれて。それを最近カントルが鎮めて……。やっと現代に到るわけだ。それを安易に療族だから、などと考えるのはここ数百年の偉人への冒涜だ。とっさには思い浮かばんが、誰だったかここの城を作ったおっさんとか、「シザ」のくせにこっちの平和を第一に考えた奴とか。もっと言えばカントルだって同じだ。

時代ごとのキーパーソンを思い浮かべ、ざっと歴史を振り返り感慨にふける。カントルとギルズが、やっと全民族平等の世の中を作ってくれたのだ。純粋に、この平和がいつまでも続いてくれれば良いと願う。

共通の趣味を見つけるより共通の敵を見つけた方が親しくなれるという、悲しい人間の性。これだけ能力の異なる民族が共生するなんて、夢物語だ。ラク・リュース城の前で、少年だったカントルに八つ当たりした日もあった。

殺すことでしか生きられぬのか、と。自分は生きる価値があるのか、などと。酒を知らない頃は大いに悩んでいた。

……最近回想にふける事が多い。その内現在と過去の区別がつかなくなるのではないだろうか。英雄が死に、その片腕が耄碌とは中々国民も不安がるだろうから、まだまだ頑張らねばなるまい。

闘族の練習場へ戻る。自分の槍を掴み、利き腕におさめる。反対の腕には円剣。

最近術族に作ってもらった槍は、中々手に馴染まない。素材の違いかもしれないし、その性質による物かもしれない。

敵に刺さると数秒間抜けない。抜ける時には相手は死んでいる。

具体的な性能を列記する残酷趣味は無いので説明はそれだけにとどめておくが、同士討ちすると恐ろしくグロテスクな屍が完成するので練習では普通の槍を用いる。木製の、煤けた質感。
「いや、見なくていいからな、むしろ見るな」わらわらという形容詞がぴったりな集い方で闘族がそこら中に集まる。
「はっ」はっ、じゃなくて……。

それにしても、と考える。戦もなくなったところで、これからは悠々自適の生活を営めると思ったら、練習場のなにやら仰々しい役職に任命されてしまい、ここに縛り付けられている。……ギルズは何を考えているのだろう。
俺が別の闘族だったとしても、俺に大将格は不似合いだとわかるはずだ。それを、術族の中でも格別の頭脳を持つギルズに、わからないはずがない。何より、奴はカントルを全面的に補佐する関係上軍帥を兼ねており、戦時中ずっと俺を奇襲班やその他に割り振ってきた張本人なのだ。
おかしい。何か奴の頭脳を全面的に駆使しなければいけない問題ごとが発生したというのか。一度に二十人の訴えを聞けるギルズの頭脳を。訓練なんぞに構っていられないほど追い詰める何かが。
頭を振る。やめよう。難しい事を考えるのは。術族に任せておけばいいんだ。
相変わらず空は澄み渡っている。もう、俺の槍術は人を殺す為の物でなくていいのだから。思いっきり体を動かせる喜びに身を任せよう。
まだまだ、肉体の方は年を感じさせない動きをしてくれる。酒の影響も概ねないようだ。むしろ自然と考え事をしている期間が伸びている事が、老化の証だというわけかもしれない。

## 4　その葬式の五年前の一混血族と「シザ」

4　その葬式の五年前の一混血族と「シザ」

「『シザ』が帰ってきたぞ！！」その一声が聞こえると、大概授業は中止になった。

生徒が皆「シザ」の方へ走っていってしまい、授業が成り立たなくなるのだ。

黄や紅のきらびやかな装飾。メンバーの無事を知らせる、高らかな笛の音。

子供心にもわくわくする、一大行事。

中等学校の人たちは、せっかく「シザ」が帰ってきても授業してなくちゃいけないから、大変だなあ。

八歳のスランは、「シザ」のキャンプへ走りながら、ふと思った。

「シザ」――――。

今では、皆さんの知っている通り「カント地方各地を巡り、特産品を物々交換していく商隊」を指す言葉ですが、その語源はなんなのでしょう。

それは、古代クロタフ語で「スィザ」、意味は「入り混じった、混合の」です。

また、古リコライド皇国で「シズァ」と言えば、「放浪している民族」を指しました。

どっちにしても、私たち混血族を指す言葉、「キァン」の語源となっています。

まあ、向こうの人たちが私たちを蔑んで使う言葉なので、皆さんは聞いた事が無いかもしれませんが。

「……せんせー」

「何ですかスランさん」

「どう考えても『シズァ』が『キァン』になるとは思いません」
「でも、事実そうなんだから、仕方がないじゃないですか」
「……。」スランは、一度だけ、「シザ」が来た時に教室に残った。
「シザ」が帰ってきても、数人は授業に残っているという話を聞いて、どんな授業が始まるのか興味が湧いたのだった。
すると、先生はこうやって「シザ」の帰還にかこつけて、語源の説明を始めたのだ。
元々ジジ臭い子供だったから、歴史や言葉の語源などには興味があったので、先生が説明を始めた時には「シザ」のキャンプに行かなくてよかった、と思った。が、この根本的な疑問に先生が答えてくれなかったので、もう二度と教室に残ったりするもんか、と固く心に誓ったのだった。

大体、「シザ」が帰ってきたというのですぐに駆けつけるような子供は、スクライトの珍しい菓子や玩具を目聡く見つけて、さっさと持ち帰っていく。
しかし、スランはそんな事はしなかった。
まず、「シザ」のメンバーの所に駆け寄って、スクライトの話をしてもらうのだ。
前回、旅立つ直前にいくつかの質問を箇条書きにして、ルィ・ソーシュという男に渡していた。「シザ」志望だ、といったせいか、内容も今となってはあまり思い出せないが、簡単すぎたせいか、とにかく彼は快諾してくれた。確かスクライトの習慣、気候風土、三民族の違いなんかについて訊ねた記憶がある。
ラスジェムには全てがあり、何もない。歴史の授業途中に聞いたその格言を、スランはいつまでも覚えていた。本来全く異なる意味なのだが、その言葉を彼は「生活する上で必要最低限の物はあるが、それ以上のものは何もない」と解釈していた。そして、「それ以上」がスクライトにはたくさんあると信じた。それ以前に、感覚的に遠

くへ旅行したいと思っていたのも、あるかもしれない。
　そこらへんが中々複雑なのだが、スクライトについて知りたかったから「シザ」に入り浸ったのか、「シザ」が好きだったから自然とスクライトも好きになったのか、ただ異郷の地に思いを馳せ、そこと自分との唯一の接点である「シザ」に心を寄せたのか、とにかく物心ついてすぐの頃からスランは笛の音を心待ちにしており、「シザ」と自分の縁を感じていた。

「それじゃあさ」数多くの質疑応答の中で、その答えだけは、はっきりと覚えている。
「療族は本当に体に傷がつかないの？刃物を腕に刺したまま何日も過ごせるって本当？」それまで爽やかな笑顔を絶やさなかった「シザ」の若者は、その問いにのみ、少し顔を曇らせた。
「全民族平等、という事に表向きはなってるんだがな、未だに療族には『選ばれた民族』という意識を持っている者が少なくない。そんな奴らから見たら、混血族（キアン）なんて穢れた民族だ。とてもそんなアホな事頼めなかった」
「ええーー！？約束したじゃん！！」
「すまん。……すまん」彼は繰り返した。
　今なら、その後にどんな言葉をつなげたかったのか、おぼろげながら予想がつく。八歳の子供に、どうにかして療族が選民思想を持ち始めたわけを説明しようとしたのだろう。
　しかし、言葉が続かなかった。その問題はあまりにも根が深すぎた。浅はかに掘り返すとスクライトについてスランが間違ったイメージを持つ可能性があった。それゆえの、「すまん」だったが、そんな事わかるはずもなく、スランは口を尖らせた。口を尖らせつつ反論しようとするが、何が不満なのかはっきり言えない。「とてもそんなアホな事頼めなかった」と、出来なかった理由は口に出しているのだ。少しの間沈黙が続いた。
「……ああ、でもな」気まずさを避けるように、ルィ氏は続けた。

「前回旅に出たときよりも確実にスリや強盗の数が減ってる。だんだんと戦時中の影響が薄れ、世の中が平和になってきているって事だ。お前が大人になる頃には療族も頼んだら笑って刃物を刺してくれるようになるさ」言ってから、さすがに妙な話だと思ったのだろうか。ルィ氏は照れるように笑った。

「へぇー……」何故世の中が平和になると療族が刃物を指してくれるのかわからないが、この人が笑っているのならいい事に違いない。彼はそう理解した。

時が経ち、あたりがすっかり暗くなると、「シザ」の帰還を祝う伝統的な宴が始まる。

といっても、別に色合いのきつい衣装を着たりだとか、踊ったりだとかするわけではなく、中央で燃やされた小さな火を見つめて、皆で酒を酌み交わすだけだ。伝統的というよりは、火が護身の役割を果たしていた時代から、旅人に続いてきた原始的な宴といった方が近いかもしれない。

しかし、そんな宴を、スランは嫌いではなかった。なんだかいるだけで楽しいし、菓子や玩具だけ持って帰ってしまうような子供には味わえない事だ、と少し優越感が持てたりするからだ。

その時スランのために出される飲み物も、不思議と甘酸っぱくておいしかった。

そして何より、親に言われて加わっているわけではなく、自主的に何かに参加している、という事が、スランを満足させたのだ。

そしてその日も、静かだが豊かな、宴の時間が流れた。

宴の雰囲気は、日常とはかけ離れた、どこか異国情緒の漂う、神秘的なものだった。「シザ」が旅に出てから、帰ってくるまでには、早くて一年、伝え聞くところによれば、戦時中は何十年も向こうを往復していた事もあったという。子供の時間は大人の時間よりはる

かにゆっくり流れるから、それだけ「シザ」が行って帰ってくるのも遅く感じる。頻度が低いだけに、この宴はどんなお祭りよりもスランの心に響く物だった。
　それでもやはり子供だ。暫くたつとはしゃぎまわりたくなる。ほろ酔い気分の大人たちの間を、それでも節度を保って、色々見て歩く。
「どうしたら『シザ』のメンバーになれるかな？」今回限りで「シザ」を引退すると言う長老格の老人は、隅のほうで火を見つめていた。
「一度でいいからスクライトが見てみたいんだけど！」その前に駆け寄り、彼はそう訊いた。
するとその老人は、ゆっくりと顔をスランの方へ向け、
「何故、そんなにスクライトへ行きたがる？」と、質問を返した。
スランは少し途惑った。
「え…だって、……面白そうじゃん！！」どこがどう、と具体的な話ではなく、スランはスクライト自体に大きな魅力を感じていたのだ。毎日同じような事を繰り返す学校の授業や、母のおせっかいからはかけ離れた世界に。スクライトと「シザ」が両方楽しめるなんてお得。将来必ず働かなくちゃいけないなら、畑なんか耕さないで旅に出たい。そんな思いもあったかもしれない。
　今でもスランは、そう思う人が少ない事に疑問を抱いている。
「『面白そう』…か……」老人の、意味深な呟き。
「中央になど行っても、何もいい事はないかも知れんぞ……。」
「そんなの行ってみなきゃわかんないじゃんか！！」実際に行ってきた人間がそう言っているのに、否定するのはおかしいだろう、と思うが、当時のスランはそれで大真面目だった。
「光の部分が明るいだけに…闇の部分もよりいっそう深く見えてしまう…」
「え、何の話？」
「権力欲や金銭欲と人が交わる所では、人間の醜さが浮き彫りにな

ってしまうのじゃ……」
深いんだか浅いんだかよくわからない老人の言葉に、スランは少し考えて、こう答えた。
「うん。お金の無駄遣いはしないようにする」少し声を低くして言ってみたのだが、言っている内容は子供そのものだったな、と、少し恥ずかしく思い返す。
その声が聞こえたのか、聞こえなかったのか、じっと中央に灯された緩い炎を見つめ続ける老人。
「うん。お金の無駄遣いはしないようにする！」で、少し語気を強めて、再度同じ事を言うスラン。
「無駄遣いはしない……か……。」横に置いてあった地酒に軽く口をつける。
「それが、…最良の策かもしれんな……。」どこまでも、意味深な老人であった。

「おいおい、その爺さんにそんな事聞いたって無意味だろうが」突然、背後から声をかけられ、振り向くと、先ほどスクライトについて訊ねた男とその友人らしき人物が、こちらを向いて座っていた。
「その爺さんは生まれた時から『シザ』だったんだからよ」ルィ氏の友人は、顔がわずかに上気していた。左手には発泡酒のビンが軽く握られている。
「どうやったら『シザ』になれるか、なんて知るわけないだろ？」
「え！？どういう事！？」「シザ」についてあまりよくわかっていなかったスランが、そう聞き返すのは当然だった。
「だーかーら、」さらにその男が続けようとするのを、
「やめろよ」突然、ルィ氏が遮った。パチッ、と軽い音を立て、火がはぜる。
「なんで」
「酔ってるからって人の素性に口出しするのは、やめろ」その表情は、先ほどスランの問いに答えてくれた優しい表情とは大違いの、

分別ある大人の顔だった。……ように、記憶している。その光景は何度も夢に見て、本物の記憶はぼやけている。本当はその友人のように、酒の入った赤ら顔だったかもしれない。ただ、その時の冷徹といっていいほど真剣な声は、忘れられない。

「は！？だから俺はスラン君にだねえ」なぜか向こうはスランの名を知っていた。

「スラン君に、なんだ」問い詰めるルィ氏。ようやく何か失言したらしいという事に、男が気付く。

「その、『シザ』が、やっぱり、そういう組織なんだって、……ね、あれ、そのね」だんだん小さくなり、口ごもる程度になってしまう。後ろを見れば、何も起こっていないかのように、全くの自然体で長老が座している。

「本人が希望してるんだ、いいじゃないか」断固とした口ぶりで、ルィ氏はそう言った。

その一連の音の連なりは、日々映像が風化していく中で、スランの心に残り続けた。

「そういう組織」とは、何だろうか。「本人が希望しているんだ、いいじゃないか」って、何がいいんだ。

「シザ」の中には身寄りのない子供もいることは知っていた。きっと、長老がそれだったのだ。しかし、そんな事がわかっても、意味がない。彼らの会話が何を意味していたのか、全くわからない。まさか「孤児もいる、後ろ暗い過去もある組織だ」と言いたかったわけではないだろう。母親は今も昔もスランが「シザ」になるのに大反対している。が、そんな事をこのタイミングでルィ氏が言い出すはずがない。わからない。

そして、スランは母に苛立ちを覚える。

あともう一言、会話が続いていたら、真実がわかったのかもしれないのに。

あともう少し到着するのが遅れていたら。

「スラン！！」それでも、母親がスランを迎えに来たのは、そのタイミングだった。

「スラン！！こんな夜遅くまで何やってるの！！」あまりにも帰りが遅いので、心配になって探しに来たのだ。重い気遣いに苛立つ。少し遠出したからって、「シザ」の人々の前で子ども扱いしなくてもいいじゃないか。

「またこんな所に来て！心配したのよ！」続くその言葉に、あくまで母にばれないよう、スランは精一杯嫌な顔をする。「こんな所」という言い方にひっかかるし、それ以前に、勝手に心配するな、という気持ちがあった。

スクライトならともかく、ここラスジェムでの裁判件数は、過去十年を振り返っても十件以下、殺人事件などはこの地で起こった噂すら聞かない。ちょっと子供の帰りが遅かっただけで、がやがやとまくしたてるのは、全くの杞憂だ。今のスランが冷静に判断しても、同様の結論に至る。正直、そんな気遣いをありがたいと思え、と言われても無理なところがある。

「だって……」

「だってじゃありません！帰りますよ！！」母親は、子供のために子供の意見を無視する。愛情という言葉で壁を作られたら、どうにも反抗できない。無理に反抗すればこちらが悪い事になってしまう。

「……さようなら」手を引かれて、俯きがちに帰るスランに対し、答える者は、誰もいなかった。

手を強引に引かれて、母親とスランは家に帰っていった。

確かに、月が空高く昇る時間帯になってはいたが、だからといって子供を強引に連れ帰っていいとは思わない。

「まさか、まだ『シザ』のメンバーになりたい、と思ってるんじゃないでしょうね？」と、そんな時に母親が、スランの意思を蔑むような言い方をした。

「あんな乞食の真似事なんかしないで、家の仕事を手伝いなさい！！」確かにスランは「シザ」のメンバーになりたいと思っているが、まだ何も言っていない。
それなのに鼻から否定されては、もはや会話する気も失せてくる。
「ああいうのはね、身寄りのない人達がやる事なの！家にはちゃんと、畑も田んぼもあるんだから、『シザ』になろうなんて考えないで！」とんでもない偏見だ。
確かに、孤児で「シザ」に入らざるを得ない人もいる。しかしそれらは圧倒的少数で、みんな難しい試験の合格者ばかりなのだ。やっている事も乞食ではない。各地を回って特産品などを売買する、れっきとした商売だ。流通を活性化する働きもある、なんて当時のスランは知らなかったけど、それでも母の言い分の間違いだけは切々と伝わって、妙に悔しくなった。
しかし、言い返すのが面倒なので、黙っておく。
「もう、息子がそんな事考えてると思うと、お母さん悲しくて…」
今度は泣き落としか。
いや、別にグレてるわけでもないし、真面目に勉強して「シザ」の試験に受かろうとしてるだけなんだけど。親を悲しませるような事ではない。と、思うには思うのだが、言い返すのが面倒なので、やはり何も言わなかった。言えなかった。

「そこで反省してなさい！」ガチャン！！と、家まで帰ってくると、母親は勢いよく門を閉めた。
しかも、その爆風のせいでスランの前髪が逆立った。くそ。さっきまで泣いてたかと思ったら、結局キレるんじゃんか。別に悪い事してないのに、何を反省しろって言うんだ。当時のスランはただひたすら、母の態度に憤りを覚えた。が、今、スランは憤りを通り越してあきれている。
母親の言い分は、結局農業をしなさい、というところに終始している。それじゃあ駄目なのだ。

カントル様が戦乱の世を統一して、これから歴史は、時代は変わろうとしている。当時わからなかった事がわかる今だからこそ、当時の母の理不尽さがより深く指摘できる。

今こそ中央と隔離されないために、「シザ」の制度を整えて、商業を発展させていかなきゃいけないはずだ。今でも母は、「シザ」の単語を聞いた時点で否定する。何故か「シザ」を忌み嫌っているのだ。

そんなのはおかしい。当時のスランは、憤りを覚えながらも、それでも「もしかしたら僕が間違っているのかもしれない」と少しは思っていた。今は違う。やっぱり一から十まで、全部おかしい。

自分は正しい。現在のスランの、円剣を持つ手が、小刻みに震える。今すぐ母を論破できそうな気がしてきた。よし、いますぐ、……と早まる気持ちを抑える。

何しろ、今母を論破した所で何の意味もないし、母はスランには使えない様々な論法を用いてくる。説明が難しいが、小数点以下第三位の計算でスランが苦しんでいる時に、第二位でさっと四捨五入して、そんな事もわからないの、とあざ笑うかのような、違う事はわかるのに何故か言い返せない理不尽で不思議な論法だ。あれで言い返されたらより反「シザ」派としての意思が固まってしまうかもしれない。全く無意味だから、口論は後に取っておこう。スランは物置の前で、一人決意する。

スランが母の言葉に憤っていた時、向こうから、ルィ氏がやってきた。夜更けも夜更け、虫の音が綺麗すぎて、こんなに寒いのに外へ出しておくなんて、と母の粗雑さを恨んでいたちょうどその時、ルィ氏は家の前まで足を進め、不意にスランにある物を手渡した。

「……これ、何？」見覚えのない、鈍く光る楕円の重み。

「円剣だ。……怪しいおじさんにもらった、とか言うと没収されるからな、気をつけろ」冗談なのか本気なのかわからない声音だった。

「言わねえよ、そんなこと」ちょっといきがって汚い言葉を使って

みた。ルィ氏は明朗に笑った。
色々な角度からそれを確かめようとするスランを、ルィ氏は
「あんまり迂闊に触らない方がいい。武器だからな」とたしなめる。
「武器？」驚き、その言葉が持つ怪しさを恐れ、同時に少し魅力を感じながら、さっきよりも慎重に触れる。盾のようにも見えるし、端にある細工からは巧妙な罠が飛び出しそうだ。そして何より、武器だと言われなかったら貴重な装飾具かと思うほどに、緻密な模様飾りが施されていた。
何故こんな高そうな物をくれるのか、と問う機会を失っていたが、それには先にルィ氏が答えてくれた。
「『シザ』の採用試験に円剣実技の項目がある。悪い事は言わん、今から練習しとけ」他意、悪意がないことだけはひしひしと伝わった。
「こうすると刃が出る。これでしまえる。通常刃に毒が仕込んであるが、毒で殺した獣は食えないからな、あんまり必要ないんで抜いといた」仕組みを説明する途中、さらっと放った言葉に引っかかる。
「……え？」ははは。冗談だよ。毒なんか元々入ってねぇから。そうルィ氏は軽く流したが、「毒で殺した獣は食えない」と何気なく口にするルィ氏に、その時スランは始めて、軽い恐怖を覚えた。
「『シザ』に来るのを心待ちにしてる。さっきあいつが言った事は気にすんな。母さんの説得……頑張れ」ルィ氏は不自然に三つの文章を繋げると、スランに質問させる間をおかずに、夜の闇へ消えていった。

過ぎてみれば、ルィ氏が訪ねてきてから去るまではあまりにも短い時間だったので、呆然としたのは覚えている。まさしく、今の出来事が夢でなかった唯一の証明が円剣の存在である、といった風だった。
そこで少しの間円剣の重みを感じ続けていたスランは、ぼうっとしながら、両親に見つからないよう、当時考えた一番安全な隠し場

所、裏庭の物置に隠しに行った。
暫くして、家に入ってもいいと母から許可が下り、スランは呆然とした気分を少しだけ引きずって、眠りについた。
そして、円剣は八年間忘れられていた。

## 5　その葬式の三年後の一混血族少年の友人その一

5　その葬式の三年後の一混血族少年の友人その一

窓ガラスに半ば張り付くように、木の枝が茂っている。青々とした若葉を茂らせ、いかにも春、といった感じ。枝の間から垣間見える澄み渡った空には雲一つない。

スランは長い道のりを経て、やっと教室へたどり着けた喜びを感じ、額の汗を拭ってバッグの中から進路調査の紙を取り出す。

円剣は、昨日親に見つからないよう自室へ持ち帰ってから少し練習した。とりあえず、円剣の練習には意外と広い範囲が必要だとわかった。最初から刃を出して練習していたら部屋の中身どころか部屋の壁までが切り刻まれ、無残な事になってしまったかもしれない。円剣に関する本を後で買おうと思った。体力があまりない事を懸念していたが、円剣訓練は暴れる獣をしつけるようなもので、向こうの力に引っ張られつつも何とか制御していくため、体力の有無以前に全力で立ち向かわないと大変な事になるぞという危惧の念が強い。結果として疲れを感じる暇もなく練習できるのだから、別にいいだろう。

元々提出してあったプリントの山の一番上に、自分のを重ねる。他と同じ向きに揃えてから、誤字脱字がないか、最後にチェックする。

問一　あなたはどんな職業に就きたいですか。具体的な物があれば記入しなさい。

（　　シザ　　）

問二　その職業に就くためにはどんな努力が必要だと思いますか。思いつく限り書きなさい。

「　中等学校の卒業試験を優秀な成績でクリアし、社会学や近代史、数学に関する理解を深める。　　」
問三　その職業に就こうと思った動機は何ですか。具体的な物があれば記入しなさい。
「　私はこの問いに対して驚くべき解をいくつか持っているが、余白が狭すぎて書けない。　　」
問四　その他何か記入したい事があれば記入しなさい。
問四って、もうこれ既に問いじゃありませんよね？　ってのが一つ。それと、問二と問三の順番を逆にしたほうが良かったんじゃないの？ってのもあります。
それから、僕個人の意見としては、貴重な資源である紙を、たった三問プラスアルファのためにこんなに消費したのが許せません。この紙一杯に問四の答えを書いた人がいるんなら話は別ですが。
ああ、別に喧嘩を売っているわけでは無いので、そこの所、考慮してくださいね。

終わってみれば進路調査と言っても簡単な物じゃないか、とスランは教卓に進路調査の紙を提出し、思う。
ただ自分が、「シザ」と書くときに感じる抵抗を無くせばよかっただけの話だ。案外アバウトな質問だったし、問二なんかもう百点満点の答えだろう。先生たちはきっと卒業試験を頑張らせたいだけだろうし、あまりわざとらしさもないから完璧だ。

軽く自己満足に浸り、自分の席へ戻る途中、
「へぇー、『シザ』のとメンバー、ねぇ……。」特徴的な鼻にかかった声が、背後から響いた。
スランの提出したプリントを勝手に見るような奴は、このクラスに一人しかいない。いや、むしろスランに絡んでくる奴も一人しかいない。
「悪い？」と振り返れば、思った通りの身長。自称「情報屋」のナンチだ。
「別に悪くは無いけど……」気取っているのか、そうでなかったとしたらどれだけのナルシシズムを持っているんだろうという指の動きで、髪をいじる。
「やめろよ」こんなにはっきりと赤の他人には言えない一言が放てるのは、やはり親しさの故なのだろうか。そう思うと頭をかきむしりたくなる。親しくしているつもりは無いのに、何故かしょっちゅう近づいてくる。基本他人に関わられすぎると鬱陶しいと感じるのに、ナンチにだけはそう感じない。表で鬱陶しいな、と言っても心の底からは憎めない、妙な男だ。
見た目からしても中身からしても、鬱陶しさしか残らないはずなのに。
「何を」

「見るのを」
「何を」
「プリント」
「なんで」
「あー鬱陶しい」無意味な掛け合いが嫌で、机の中から本を取り出す。昨日は闘族の男が謝りに来た所で終わっていた。主人公がとうとうこれから山に入る、噂で聞いてしまったクライマックスのシーンに、刻一刻と近づいている。
「単に『シザ』のメンバーってだけじゃあさ」物語世界へ没入しかけたところで、またナンチが近づいてきた。
「だから！」本を傷つけないように、それでも気持ちが伝わるように、机へ叩きつける。
「何」
「何……って……出来れば、……放っておいて欲しいなあ……と」全く悪びれる様子なく言われると、対応にも困る。
「……もう、ね、プリントくらい勝手に読んでもらってかまわないんで、ね」何故か言い方が丁寧になる。
「あ、そう」何気なく返し、横を向くナンチ。教室の後ろを見つめる。
「……」相手が反論しないせいでこちらも反論が出来ず、仕方なく押し黙り、主人公のもとを闘族が訪ねる。
「……で、何の用だ」暗く冷たい空気が、二人の間へ割って入った。窓の外にはひたすらに、破壊と惨劇の跡が残っていた。彼は居心地悪そうに少しだけ小屋の中を見渡し、切り出した。たいまつの火が、ぼんやりと二人の影を映し出した。
「レストの件だが」
「まだ何かあったのか」全てを言い終わる前に、鬱陶しげに返すペンドール。その瞳は赦しを請おうとしている男への興味自体が、消え失せてしまったかのようだった。
「いや、俺はただ」

「もうこれ以上俺を束縛するのは、止めてくれ」どこへ出かけようというのか、男を押し退け、扉を開けた。肩にかかっている袋の中には、一面、廃墟と砂漠ばかりであるこの地を、逃れられよう物など入っていそうになかった。
「……すまなかった……！！」
「もう良いと言っただろう？下らない潰し合いも、権力抗争も」そして最後に、振り返りつつ言い放った。
「俺はもうラスジェムには戻らない。戻ってきた時、そいつはもう……俺じゃない」そして彼は、魔物の巣喰う地として恐れられてきた、ベスディオ火山へと歩んでいった。
……歩んでいった所で、仕方なく話しかける。未だに後ろの壁を見つめているナンチに。
「で、いつまでそこにいるつもりだよ」
「読み終わるまで、かな」むしろ横で待機される方が鬱陶しい。ふう、とため息をつき、
「なんだった？」ついに折れる。だんだん無視している自分が悪人に思えてくる不思議。
「まさか、『シザ』って書くのやめろとか言い出すんじゃないだろうな？」歴史の古い家の人間ほど、「シザ」に対する抵抗は強い。特に特権が認められているわけではないが、ナンチの家は千二百年続いてきた、名家といえば名家だ。千年以上ずっと畑を耕し家畜を飼ってきたわけで、そう考えると名家と呼ぶのに抵抗を感じるが。
「そんなわけないだろう？」語尾が延びる。だろ、って言い切れよ、とスランはそんな点も気に食わない。
「『シザ』の中で何になりたいかを書いた方がいいんじゃないか、と思ってさ」
「は？」
「『シザ』の中でも色々あるだろ、会計士やら分析士、世話士、調理士……」いきなり知らない単語が連続し、スランはあせる。が、少し考え、頭の中でそれぞれを分解してみれば、何の事はない。組

織としてあって当然の、役割分担の話だ。
「ああ、あれな」動揺を上手く隠せたかどうか、自分ではよくわからない。会計士やら分析士やら、名前すら全く知らなかった。思い出してみれば、ルィさんも名乗る時、前に何かつけてたような。「〜士のルィ・ソーシュです」……何かつけてたような、気もするが、そんな気もしないといえばなかった気になってくるし、第一昔の事過ぎて明確には覚えていない。
スランは、いつも見送りの時、質問書きをルィ氏に渡していた。それが、八年前の見送りの際渡せなかったのをきっかけに、少しずつ疎遠になっていったのだ。八年前から今まで、「シザ」がラスジェムに帰ってきたのは約二年おきに三回。もうすぐ四回目の帰還だが、そんな長い周期を一度欠かした以上、現在のスランと「シザ」の接点が全くなくてもなんら不思議ではない。
「問二の答えから見て、スランは分析士になりたいみたいだけどね。それならちゃんと、そう書かないと、後でうける教育相談の時に不利だよ」スランの心中を慮る由もなく、ナンチはさらさらと続ける。
「あ、ああ、そうだな」嘘をつくのもごまかすのも苦手なので、かなりわざとらしくながらも、相槌を打つ。本にしおりを挟み、教卓へ向かった。

自分の紙を手に取り、分析士について考える。スランの紙の下にはやたらと一文字の大きい、苦労した跡の窺える男子生徒の紙が重ねてあった。
「中等学校の卒業試験を優秀な成績でクリアし、社会学や近代史、数学に関する理解を深める。」という文面から、ナンチは分析士だと判断したわけか。という事は、分析士は社会学や近代史の内容を使う仕事。向こうを旅する途中で、世界情勢なんかを分析しメンバーを導く役割かな。
待てよ。スランは教卓の前で動きを止める。そういえば、ルィさんは何の試験を受ける時必要だと思って、円剣をくれたんだろう。す

べての役割に共通して円剣の試験があるのだろうか。「シザ」は、時には全員で戦う必要があるような、危険な組織だったのか。あ、それじゃあ、ルィさんの友人が言っていたそういう組織って、その意味だった。安全ではない組織だ、と言いたかったのかな。いやいやそれは発想が飛躍しすぎか。

頭がこんがらがってきたので、とりあえずスランはナンチに訊こうと席へ戻る。

「ぶ、分析士の試験って、何が出たっけ？」あくまで忘れてしまった、という風を装い、ナンチに質問。第一、自分が何故社会だとか数学だとかのイメージを持っていたのかもわからない。

「ああ、だから、あれだ、社会学全般と数学科の筆記試験と、円剣の実技試験だよ」それこそ問二の内容とそっくりかぶっている。

「……円剣は全部の役割で必要になってくるよな？」

「そうだね」その言葉を聞いてから、なんで訊かれてすぐに答えられるんだろう、とナンチに少し、尊敬の念を覚える。興味のある事ならまだしも、彼は家柄からして「シザ」との関わりなどあろうはずがないのだ。とりあえずルィ氏の友人の事は脇に置いて、書く物を取り出す。

いざ「分析士」と追加記入しようとして、ほんの少し途惑う。ナンチが言っただけで、そんなに簡単に決めていいのか、という意見が出てくると同時に、どうせ現在の希望を書くだけのものなんだから、と反論が浮かび、ひとまず分析士にする事は決まったのだが、それ以前に、まず自分が「シザ」志望なんて書いていいのだろうか、と心配になってきたのだ。

なりたいと言いながら、漠然としたイメージしか持っていないし、「シザ」内の役職だってついさっきまで知らなかった。こんな自分が「シザ」志望なんて書いたら、もっと真剣に目指している人に失礼ではないのだろうか、と一瞬書く手が止まる。

が、別にいいか、そこまで重要視する必要もあるまい、と結局（

分析士）と付け足す。

問一　あなたはどんな職業に就きたいですか。具体的な物があれば記入しなさい。

（　　シザ（分析士）　　）

……。

少しの間をおいてから、無言でその文字を消す。ナンチが少し途惑う表情を見せたが、同じ事を書き直すのだとわかり、また気取った表情に戻る。

問一　あなたはどんな職業に就きたいですか。具体的な物があれば記入しなさい。

（　　シザ（分析士）　　）

「……ああ、まあ右に寄ってたしね」

「うん」再び、教卓に置きに行く。スランが書き改める、そのわずかの間に別の誰かが提出したらしい。先ほどまでスランの紙の下にあったものとは違う、丸い女性的な文字が並んでいた。

# 6　その葬式の三年後の一混血族少年の帰り道

6　その葬式の三年後の一混血族少年の帰り道

その日の帰り道。いつもと変わらず、ナンチはスランに絡みつつ歩き、少し離れた所を一人の女子生徒が歩いている。その三人の前後には、もう少し密着した、男子同士女子同士の群れが出来ていた。

狭い路地の、道は石造り。家も石造り。門も石造り。建材として利用できるほどの木は採れない、砂漠に囲まれた地形環境に由来する。額にはいつしか汗が浮かんでいる。強すぎる直射日光のせいで、黒色金属の門さえ色褪せて見えた。

横ではナンチが何かを話している。話している以上何か返事をしてやらなければいけないし、余計な体力を使わないで帰りたいスランとしては、正直邪魔だ。別の人に絡んで欲しい。

「それでさ、」話し続けるナンチの隙を必死に探し、言葉が途切れた瞬間に口を挟む。一気に多くは喋れない。バッグが重すぎる。体力を奪いすぎる。

「何」

「僕以外に帰る人いないの？」

「ん？」否定的な口調に、ナンチの声音が少し変わる。

「……んなわけないよね……」皮肉を言い始めた瞬間に自分の中で反論が生まれ、速やかに前言撤回した。　ナンチはスランと違い交友関係が非常に広い。知識量が多いので色んな人間と話が合うのだろう。なにやらマニアックな歴史の議論をしている中に平然と割り込み、他に圧倒されない姿勢を見せた事もあった。

「え、何故君と帰るのかって？いやあ、僕はこう見えて口が軽いからねぇ。うっかり喋っちゃいけない情報を漏らしちゃったりするわけだよ。まあこう暑いと気も緩むからね。うっかり漏らしたせいで恨まれたりしたら損だろう？その点君は心配ない。誰と誰が付き合

ってる、とか、今度の試験では何が出そうだ、とか興味ないからね」
「こう見えて口が軽い」って、見たままじゃないか、と、スランは饒舌すぎるナンチに閉口する。が、本当に口を閉ざしてしまっては失礼な気がするので、
「うん……」といい加減な相槌を打つ。

それにしても歩く速度が早い。そろそろ脇腹が痛くなってきた。毎日ナンチと帰っているのに、未だに慣れないのは何故だろう。微妙な歩幅の差がその内に大きくなっていく。認めたくないが、ナンチは足が長い。息があがる。
よくもまあこんなに喋り続けていられるものだ。
「聞いてるかい？」時折、その言葉が挟まる。
「ああ、うん。聞いてる聞いてる」別に聞いていてもいなくても、彼の口は止まらない。わざわざ確認しなくても、きっと大して聞いていない事もわかっているのだろう。それでも関係にひびが入っていないのは不思議な事だ。
「聞いてるけどさ、」分岐路に差し掛かり、ナンチの方が若干早く曲がっていく。
「聞いてるけど、……ねぇ」はぐらかし方だけは、上手くなった気がする。
「全くだよ」なんとなく、先ほどまで聞き流していた言葉のつながりを思い出しつつ、社会学教師の話だと理解する。ちょっとは、自分の意見を述べよう。
「教壇の上で自分の意見を口に出してはいけないわけだけど、」一気に言ってから二歩歩く。
「かといって雑談なしでずっと講義し続けってのも、」ふう、と汗を拭い、
「聞いててつらいよね」言い切る。
「うんうん。あの年まで生きててうんちくの一つも無いんじゃあ、まず先生として駄目だと思うしね」とっさに同じ話題を共有できる

という事は、話を聞いている事になるのだろうか。
いや、まず話を聞いている、理解しているの定義はなんなのだろう。どこまでの理解度や習熟度を持ってよしとするかは個人差がある。話の内容を5分の1しか聞いていなくても、相手の言葉に完璧に反応できたらそれでいい、相手から見たら完璧に理解しているように見えるんじゃないか。
しかしその前に、相手がそれについて完璧に理解しているはずも無い。人間だからだ。さらに言えば、言語を介する事でさらに本来の内容から離れていってしまう。既存の言葉、ある一単語に対する感覚のずれは多少なりとも存在し、それが積もっていけばやがて食い違いが生じる。表面上で会話が成立していても双方わからないという事態が発生しても、なんらおかしくは無い。しかしやはりそれでも人間関係の維持には役立つのだから、……。
頭の中で単語をこねまわしても、何分疲れているので、全く理論が先に行かない。また、何を考えているのか一言で説明できない。何を考えているのかわからないのに、やたらと頭が疲れる。
景色は家に近づいている。見慣れた景色が広がって、空気さえ少し違う物に感じる。長かった競歩寸前の道のりも、もうすぐ終わるんだ。ナンチと別れたらゆっくり歩こう……。

ラストスパートのつもりで、ナンチの少し前を歩く。
帰ったら何をしよう。本ももうすぐ読み終わるし、やっぱり円剣の練習だろうか。
「……だよね、やっぱり」
「うんうん」適当な相槌を続けながら、帰った後の事を考える。
円剣の練習をするにしても、広いスペースが必要だ。久しぶりに西の森まで行こうかな。いや、その前に型の勉強をした方がいいか。実技試験と言っても、猛獣と戦うわけでもないだろうし。
「あれ、スラン」ナンチが髪をいじっていた指を、止める。
「ん？」

「今日は本屋行くんじゃなかったのかい？」ちょうどタイミングよく、ナンチが重要な事を思い出させてくれた。型を練習しようと思ったのに、家に円剣の本がなかったのだ。ふと辺りを見渡せば、それもそのはず。大きく道が分かれている。ここで曲がらなかったら、本屋へ行くのに遠回りになってしまう。

「ああ、そうだったね」

「本屋に行くんなら、ここ、右に曲がらないと」結局、押さえるべき所を押さえてくれるから、度を過ぎて邪険な扱いは出来ないのかもしれない。いや、まあどこまでを「度を過ぎた扱い」にするかは考えないとして。

「……どうして本屋に行く事を知ってたのかわからないけど、ありがとう」

「ま、情報屋だからね」手をひらひらさせて、自分は左へ曲がるナンチ。どことなく気障だが、まあいい。

このまま左に曲がっていたら、家に帰るまで、本屋に行く予定だった事を思い出せなかったはずだ。そして一旦家に帰ったら、本屋へ行くのが億劫になっていただろう。

外出する時に母に見つかれば、どこへ行くのか根掘り葉掘り問い詰められ、なんだかんだと怒られた後仕事を手伝わされる羽目になるかもしれないからだ。必ずそうなるとは限らないが、かなりの高確率で農業に従事する事になる。家から本屋までは割と遠いし、明日の帰りに寄ろう、という事になっていただろう。本屋に行ってから目当ての本が手に入るまでには、最低でも三日はかかるから、行くのは早ければ早いほどいいのだ。

右へ曲がる。直角ではなく、道がだんだん広がっていき、その中央に家が建った、という感じの穏やかなカーブだ。日当たりが良く、道は暑い。いつか見たのと同じ鳥が空を羽ばたいていた。

## 7　その葬式の三年後の一混血族少年の友人その二

7　その葬式の三年後の一混血族少年の友人その二

スランが脇腹をさすりつつ、少し速度を落として歩いていると、ずっと後ろを歩いていた女子生徒が、スランの横に並んだ。そのまま二人とも黙って、十歩ほど進む。

スランと比べ、常にほんの少しだけ高い身長。多分、髪は長い方なのだろう。細めの体に揺れ動く髪が印象的……なのだろうか。よくわからない。自他を問わず外見に全く興味がないので、人体に関してはあまり多くの表現を知らない。

スランの唯一の女友達であり、行きつけの本屋の娘であり、フェル、と呼ばれている少女であった。

「えーーっと、」中々話を切り出さなかったので、聞いてみる。

「で、今日はどんな話を？」

「『知識の一般化』についてのギロンです」調子の乱れない声。革表紙の本のような、という表現は失礼だろうか。大人びた存在でありながらも、どことなく少女とも呼べるような、……同い年の女友達、とまとめる他あるまい。

唯一の女友達だ、とスランは認識しているが、向こうがどうなのかはわからない。彼女とは通学する途中、下校する間にしか会わないからだ。常に向こうが議題を持ちかける形で、会話が進み、後から思えばなんて事のない内容でも、つい真剣になってしまう。圧倒的に他と密度の違う会話を行っているせいで、直接話したわけではないフェルの性格が、スランには薄々わかっているし、それはフェルだって同じだろう。しかし彼女の人となりは全く知らないし、クラスだって知らない。まだ問われた事は無いから女友達だという認識でいいのだが、実際誰かに聞かれた時、「友人です」とは言えな

いかもしれない。そんな関係だ。思考方が、男女の差なのか純粋な個人差なのか、全く異なっているのが興味深いし、実害は無いから、いつまでも友人で居たいと思う。しかし、それ以上の勘繰りを入れられるような感情は存在しない。知性を持って世界を知覚しているような女性に、女性だからという意味で好意を持つのは失礼な事のような気がするし、向こうがスランとの関係にそういうものを期待していない事くらいはわかる。

「三年前からスクライトで普通教育が始まりました」前を向いたまま、フェルは唐突に喋りだす。「『知識の一般化』についてのギロン」が始まった。どのような経緯でこういう問いかけをスランに持ちかけてくるかは不明だ。学校で習った内容についてそのまま聞いてくることもあれば、いきなりこうやって話し出す時もある。どれも例外なく面白いので、スランは耳を傾ける。

「術族と高位の療族以外でも教育が受けられるため、知識が解放されたという意味で『知識の一般化』と呼ぶ事を、彼らは好みます」

「へぇ」文法に従いすぎている言葉遣いも、不思議と違和感がない。周りを見やっても、こちらを向く生徒はいない。

「私たちの中等学校は創立五百四十二年です」

「そうだっけ」

「そうです」

「へえー」要は、つい最近スクライトで始まった普通教育が、ラスジェムの混血族の間では以前から行われている、と言いたいのだろう。それにわざわざ創立何年かの数値を持ってくる話し方が、地味に興味深い。

「ラスジェムでは、すべての子女に教育を受けさせる事が義務であり、権利となっています」

「それは、……確か先生が言ってたっけ」

「さあ、何故でしょう」ここで問題提起だ。スランは考え始める。

「シザ」しか対外への繋がりがないため、一部の職業の人以外はス

クライト本土についてはほとんど知らない。それこそ史実と伝承がごちゃ混ぜになっている状態で、学校で習う中にも、平然と神々の怒りで滅びた都市とかが出てくる。本当の事を知る人々も、職業柄仕方なく入手した情報が多く、うっかり重大な秘密を漏らさないようにそういう話はあまりしたがらない。

その「一部の職業」の中に本屋が入っていたわけだが、三年前からスクライトで普通教育が行われ始めた事など、農家のスランが知る由もない。フェルが、これは漏らしても良さそうだと判断した情報は、往々にしてスランの世界を広げてくれる。

「普通教育の行われ始めた時期の差、か……」不思議と言えば不思議だ。向こうは長い間戦乱の世だったとはいえ、教育なんて国の礎、基本中の基本。今までスクライトで限られた人しか教育が受けられなかった方がおかしい。

いや、逆に向こうからすると、それが普通なのだろうか。向こうは生きていくのが必死な世界。必死さの度合いは違えど、多くの人間がぎりぎりの所で生活しているのだろう。教育なんてやっている暇がないのかもしれない。

こっちは長い間畑を耕し続けてきた。基本的に、農業は助け合いだ。弱肉強食なんて言葉とは程遠い、正直明日が続いていくのが当たり前すぎて、スクライトで戦が起こっているなんて実感がわかない。平和だからこそ、皆で知識を与え合おう、という結論に達するのだろうか。

「私は、巨大な陰謀を考えました」突然、フェルが妙な事を口走った。あまりにも周囲の何気ない和やかさと無縁の言葉に、……言ってみればこのギロン自体現実味がないが、スランは少し驚いた。

「え、陰謀？」

「陰謀とは少し違うかもしれませんが、私の家は本屋です」

「それは承知しています」釣られて同じような言葉遣いになってしまった。それにしても、今日はまた一段と出発点が遠い。いつも無関係に見える二つの事項が結びついていくのだが、「陰謀」と「本

屋」をどう繋ぐつもりだろう。そしてそれが、どうやって普通教育の話に結びついていくというのか。
「本の関係で、父は時たまスクライトへ赴きます」
「術族に会うため？」
「はい」ラスジェムの本屋は、スクライトの術族から本の型を仕入れ、注文の度に新しい本を作る。スランが本屋に行ってから、入手に最低三日かかるのはそのためだ。もちろん欲しい本が見つかるまでの期間が長くなれば、入手時期も遅れる。
「そこで、私は少し考えたのです」こう前置きして話す時、大抵フェルの思考は「少し」に留まらない。
「ラスジェムには、術族を通してしか本の型が入ってきません。それも、父が本の型を調べているのではなく、術族からまとめて渡されるのです。仮に術族が自分たちに不利だったり、私たちに知られたくなかったりする本だけ渡さずにいても、私たちにそれを確かめる術はありません」
「……へぇ、っていう事は、術族が、意図的に流出する情報量を抑えていると？」
「証拠がない以上そこまで断言は出来ませんが、多分、事実に限りなく近いところでしょう」いきなり大胆な事を言い始めた。陰謀の時点で物騒だが、これは、世界人口の四分の一を疑っているに他ならないじゃないか。混血族全体が家族のようなものであって、その保護の下、殻の中だからこそこんな事を堂々と主張できるが、これが仮にスクライトであったなら、法では裁かれなくとも白い目で見られる事は必至であろう。
「私の父は十二代目です」
「え、……本屋の？」そんなに長かったのか、と素直に驚く。
「一代五十年と見積もっても六百年。これでもさほど古い内には入りません。スクライトと関わる職、例外中の例外の一つが、本屋なのです。約六百年も前から、このスタイルは維持され続けてきています。大昔から術族が情報操作を行っていたなら、もう相当量、私

たちの知らない情報があるでしょう」前を向いたまま、まるで他人事のように語り続けるフェル。しかし、それがもし本当の事なら、ラスジェムは危機的な状況にあるじゃないか。
「……べ、別に、ずっと情報操作を行ってきたわけでも」
「はい」とりあえずの反論を、冷静に遮った。
「確かに情報不足です。仮に情報操作したところで、彼らに何の利点があるのかもわかりません。ですが、最近知ったこの本屋の仕組みは、いかにも不正が蔓延りそうではありませんか。利潤を目的として武器や技術を売り歩く『シザ』が、時として戦局を左右したそうです。『シザ』に通じるラスジェムに、ある国に関し不利な情報を隠したい、などという感情は、ごく自然におこりうると思います」
「……ううん……」唸りながら歩く。歩くスピードはフェルがスランに会わせているので、もう腹痛も治まった。代わりに頭痛がしそうな難問を突きつけられたわけだが。
「時に、」フェルの声が変わる。
「高い知識が共有されている国は、どのような武器を保持する国より強いです。そして、共通の敵を作る事が、実は一定区画内の平和保持には有効です」
「え、な、……何の話？」戸惑いを隠せない。隠す気もないけど。鼻っから話の内容が難解すぎて、ついていけているのか自身がない上、今度は何を持ち出してくるというのだろう。個々の話は理解出来ているはずなのだが、……妙に理論がふわふわする。足元に重大なミスがあるのでは無いだろうか、と思い。それでもフェルは話し続ける。
「先人は、術族が情報操作している可能性を憂い、孤立しており、恐慌が起きたら一気に滅亡してしまうような地形を憂いた。そして、術族を仮想敵と看做し、情報操作に対抗するべく正しい判断力をつけようと思った。これが普通教育の始まりだと思うのです」
「え、」発想が縦横無尽に過ぎて、ついていけない。
「ちょ、ちょっと待ってね」

「本屋までの道のりは遠いです」横を向くこともなく、先ほど自分の話していた密度の高すぎる主張もなかったかのように、フェルは涼しい顔で歩き続けた。

## 7　その葬式の三年後の一混血族少年の友人その二（後書き）

……風邪ひいてました。

## 8　その葬式の三年後の一混血族少年の友人その二その二

8　その葬式の三年後の一混血族少年の友人その二その二

多分、本屋を通じて情報操作が可能だという点から、他でも色々と付け入る隙を与えているのだろう、と仮定し、それに対抗するために普通教育制度を設けたという事だろう。教養があれば流言飛語に惑わされにくくなる。筋は非常によくわかるのだが、どうも納得できない。

けれどどこが納得できないのかと考えれば、やはり合理的じゃないかと主張してくる。こんなに頭が回らなかったっけ。闘族の血も術族の血も少ない割に、怪我の治癒速度は大した事無いし。ていうかやっぱり、血の話に摩り替えるのは混血族特有の逃げだろうか。

「だ……だいたいさ、」

「はい」

「なんでそんな事考えようと思うわけ？」意見がまとまらないので、普段聞かない事を聞く。

「授業中暇だからです」あまりにも単純明快な答えに、絶句する。しかしまあ絶句し続けるとそのままの状態で足だけが進み、この途方もないギロンが終わらなくなるので、間を持たせるために喋る。ただでさえ残りの道のりから終わる気配がない。

「他にこんな事考えてる人いないでしょ」と、それを言った途端に、フェルの歩みが止まった。

「こんな事……」

「んー、あー、いや、内容は興味深いんだけどさ、やっぱり何の権力もない子供が真剣に討議してどうにかなる内容じゃないかな……って思ったりして」どうも気を悪くしたようだと思い、慌てて補足する。やはり聞かない方が良かったのか。

「他の人はさ、もうちょっと、なんだ、聞いていてばかばかしくな

ってくるような事とか話してるわけじゃん。いや別にばかばかしい話がしたいわけじゃないんだけどもさ」言っていく端から、自分が口に出し始めた言葉の無意味さに気付かされる。フェルの前で安易に発言すると、無知がさらけ出されるような気になる。

「多くの混血族は、知識の共有を娯楽としています」その声は心なしか少し冷たかった。

「どうせ本屋へ行く途中暇なら、こういう他愛もない雑談もいいじゃないですか」考えてみれば、何故自分の家の事を「本屋」としか呼ばないのか。そして国家レベルの陰謀を何故「他愛もない雑談」で片付けられるのか。普段と違う話の展開のせいで余計に興味が起こったが、今の調子でそんな事聞けるはずもない。彼女が聞かれたい事かもわからないし、とりあえず押し黙る。

真に「他愛のない雑談」が、脇を通る女子生徒の群れから聞こえた。気まずい空気を作ってしまった。

鳥はさえずり、空は青い。額には汗が浮かび、これからもっと暑くなる事を予感させる、何故か心躍る感覚がそこここに満ちている。

「反論がないなら補足します」ずっと続くかと思われた空気を、フェルが破ってくれた。

「仮想敵がいない限り、ラスジェムがここまで平和なのはありえないと思うのです」先ほどの失言もあり、元の調子で喋るのには抵抗があったが、とりあえずの相槌を打つ。

「うん……え？」打ったあとで言葉の中身に気付き、反論しようと思うが、出来ない。

「向こうでは『歴史の必然性』とか呼ぶらしいですが、学習する限り、どの時代でも一定の周期で戦が起こっているのです。このカント地方に留まらず、です」再び歩み始める。

「支配層が変わらなかったケースも含めれば、何百年も続いた体制中であっても、それが適用されます。いくら専制政治の連続であっても、百年や五十年でころころと政権が変わるのは不自然です。な

んらかの力が働いていると見ていいでしょう」
「それが、……えーーっと、戦を起こさせる力が、ラスジェムには長い間はたらいていないと？」
「そういうことです」思ったほど怒ってはいなかった。そう見えるだけかもしれないが、とりあえず元の調子でギロンが成立し始めた。
「しかし、はたらいていないという事は、一定の組織である限りありえません。それでこれだけの平和を維持し続けるとなると、何らかの形で、民衆の内に篭ったエネルギーを、発散させる必要があると思うのです」
「へえ」相変わらず発想の飛躍が凄い。断定口調で証拠不十分な事柄を次々と断定していき、それで辻褄を合わせてしまう。いつも頭がふわふわする感じを覚えるのは、フェルの構築する世界と、自分の感じている世界が食い違うせいかもしれない。
「へえではありません。反論してください」不自然な間が空いていたらしい。フェルに急かされた。
「え」
「私の考え方の癖です。他者に冷静に反論してもらわないと仮説の誤りに気付けないのです」
「はあ、まあ、それは」適当に言葉を繋ぎながら、仮説の誤りについて考える。
　別に完璧でなくてもいい。こちらでフェルに負けないような仮想の世界を構築してしまえば、二つの意見からより真実に近いものが出来るかもしれない。
「……情報不足だよね」
「はい？」
「いや、『知識の一般化』についてギロンしてる最中に言うのもなんだけどさ、与えられる情報が少ないよね」職業選択の際にも感じた事を、言う。
「大いに空想する余地があります」
「それでいいなら、少々感傷的な説を述べるよ」

「いいです」

「まずさ、その『歴史の必然性』っていうの？必ず一定の周期で戦が起こる法則なんて、ないと思うんだ。積みあがってきた歴史を総合的に見て判断するのは、どうも間違っている気がするんだよね」と、合いの手を待ち歩き続けると、どうにもフェルが何も言ってこない。黙られたために困惑する。

「あのさ、例えば黒色金塊を掘り当てようと思って山の中腹を永遠と掘っていた男がいるとするじゃん。結果的に黒色金塊がなくて、山の向こうまで穴が通っちゃったとして、……『歴史の必然性』は、最初からその男がトンネルを掘ろうとしていた、と言うような物……だと思うんだよね」

「はあー」ついぞ聞いたことのない言葉を発する。ため息ではなく、感嘆の声、だろう。

「すなわち、人類が追い求めて止まない理想郷を『黒色金塊』に例え、それに向けてがむしゃらに邁進しているのが現在のスクライトの人々だ、と。『歴史の必然性』はあくまで結果……人類の足跡の一つでしかないという事ですね。確かにカント地方以外で『歴史の必然性』を考えるのはこじつけのような気がしてきました」

「いやいや、何もそんなに深い例えじゃないんだけどもね」否定しつつも、真面目に聞いてくれたのが少し嬉しい。

「元から『歴史の必然性』なんて向こうの術族が言っているだけの妄想だとしたら、ですか」

「うん」その言葉を受け取りつつ、本屋までの道のりを考える。ようやく少し自分の意見を言葉に出来たと思ったが、それを含めてこの話を終わらせるには短すぎる。

「まあ、仮想敵のおかげでラスジェムの平和が成り立っている、というのは、あまり賛成できないかな」なんとなく、話をまとめる方向性に持って行く。

「そうですか」

「闘族の血を発散させないと平和が維持できない、なんて性悪説に通じる考え方は嫌だし。歴史が繰り返すっていうのはまあ古今東西に言われる事かもしれないけど、少なくともスクライトでは、戦のたびに進歩している気がするんだよね」
「……闘族優位と療族優位が交互に訪れているだけで、武器以外特に進展は無いように思いますが」
「いやいや、でも今回やっと全民族が平等に暮らせるよう法も設けられたし、『知識の一般化』だって始まったじゃん。全くの無進歩から、いきなりこんな改革が起こるとは考えにくいよ。スクライト全域って言ったら、ほぼカント地方全域だしね」
「今回は、聖魔剣が向こうの人々の手に渡ったせいです。あれがなければ今でも争いは続き、ロウェン・カントルの出る幕はなかったでしょう。だいたい晃皇が全くの独断であのようなものを所持し」
「ああー、それはまた今度にするとして、」次に三つ目の角を曲がれば本屋が見える。この上諸説あるロウェン・カントルの武勇伝にまで話を伸ばしたら、本当に収集がつかなくなる。
「『歴史の必然性』があるとすれば、それは民衆の不満であって、闘族の血では無い。よって不満のないラスジェムでは仮想敵がいなくてもおかしくはない」自分でも驚くほどまともな意見が口から滑り出した。フェルは不意に黙り込む。といっても不機嫌な風ではなく真剣に考えているせいだろう。
　流れ落ちる汗に、唐突に気付かされる。ずっと喋り続けていたせいだろう。手を額に滑らせる。左のスランが大回りする、約四十五度の角を曲がると、ついにフェルの実家が見えてきた。三階まである、見栄えのする巨大建築だ。扱う商品が本なのと関連があるのか、全て木で作られており、周りと違う、それでいて妙に馴染んだ建物となっている。
「今度はいつ本屋に来ますか」フェルの言葉に右を向く。考えてみればずっと前を向いていて、直にフェルの顔を見て話していなかった。逆に視線が合いすぎて、顔を前に向ける。少ししてから再び右

を向くと全く同じ角度で視線が合い、今さらながらに女子生徒と話しているという事を自覚し、少し恥ずかしくなる。
「……三日後、……ですね」何故か丁寧に。
「そうですか。とりあえずそれまでに『知識の一般化』について調べておきます。結論が出ていません」
「……ああ、……そうか」今の瞬間、自分が酷く性に合わない事を考えていたんじゃないだろうか、と心配になる。
「結局本題については話してなかったからね、後半」本屋の前にたどり着く。その返事を言うより先に、フェルは店の脇を通り、自分の家としての本屋へ入っていった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3010w/

カントル　スラン編

2011年11月17日03時28分発行